

主の業を見よ

「イザヤ書」43章14～21節まで朗読。

18, 19節「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。19 見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」。

聖書を通して証しされている神様は、どのような神でいらっしゃるか？ そう問われて何と答えましょうか。いろいろな答えがあると思いますが、その代表的なものは「神は愛である」ということでしょう。私たちの信ずべき神様は、愛なる御方ですと、これはもちろんその通りです。また「神様は全能の神でいらっしゃる」。オールマイティー、神様にはできないことのない御方ですと信じる。これも私たちが知っている、聖書を通して証しされている神様のご性質といえますか、神様の特質であります。もう一つ言うならば、「創造の神」、万物の造り主でいらっしゃる神、聖書の最初に「創世記」と、世を創るというタイトルが付いた箇所がありますが、まさに森羅万象、ありとあらゆるものを創造なさる神様、造りだされる神様です。夏になると暑いですから、涼を求めて、山や海に出掛け、大自然に触れます。そういう所へ行くと、普段見慣れた都会の、人工に満ちた、人の業に満ちた生活から、広々とした、自然の雄大な風景に触れる。それは心洗われる思いがします。「神様は何と素晴らしい物を

お造りになられたな」と思います。大海原を眺める。遠くに浮かぶ白い雲を見て、はるかかなたを思う。また夜空を、殊に夏の夜空に星空を眺めて、悠久の世界を思うと、実に風流な気分になります。そうするとき、「神様は素晴らしい御方だ。こんな大きな物を造り、宇宙を造り、今もそれを運航していらっしゃる神様。これは素晴らしい神様」と思う。それはそれで間違いがないことでありましょう。

ところが、そう言いながら、「あなたはどうか？」と、「あなたは誰によって造られたのか？」。そこで、はたと、「私……、私はこれまで自分が頑張ってきた」。これまでの人生、初めは親の元で助けられて育てられてきたが、それからの人生は、私の努力と、様々な戦いの中で、忍耐し続けて今があると思っている。神様はどこにいらっしゃるかと、天地万物を造られた神様、そちらの方はいともたやすく信じますが、自分がその神様の創造物、いわゆる被造物、神によって造られたものである、しかも、今も神様の創造の御手の中に造り出され続けていることを、私たちはすぐに忘れやすいのであります。ここは私たちの信仰の、実は要(かなめ)であります。私たちの普段の生活から遠く離れた大宇宙であろうと、はるかに広がる山並みを眺めようと、あるいは大海原を見ようと、それは忘れても構わないのです。それは誰が造ろうと、大切なのは「自分は一体誰に造られ、誰によって生かされ、今ここに在るのか」を自覚しているか。ここが神を信じることに

他なりません。自分のことは横に置いて、「神様は素晴らしい御方。こんな素晴らしいことをなさる。大きな力をもった御方でいらっしゃる」と褒めたたえはしますが、翻（ひるがえ）って、自分の生活を振り返ると、いろいろと思ひ煩う、悩む。「どうしてこうなった」。不安や苛立ちなどで、心が騒ぐ。自分の氏素性、生まれ、育ち方、様々なことが、今の自分になっていると思う。「親が悪い」「環境が悪い」「社会が悪い」「政治が悪い」「教育が悪い」と、「だから、今の自分はあるべき自分ではない」と思っているならば、それは大変な間違いであります。「詩篇」139 篇にも詠（うた）われているように、私たちを、母の胎に命を与え、そこで内臓を造り、骨格を造り、時を定めてこの世に生まれさせ、造り出して下さったのは、神様でいらっしゃる。神様は、私たちのこの地上での一日もなかった時、既に、私たちの生涯を全て記しておられる。ご計画して下さっておられる（16 節）。「神様は勝手に私の人生を決めて困ったものだ」と思ひやすい。しかし、私たちは神様の創造の御手に、今も握られているのです。

この先の所を読んでおきたいと思いますが、「イザヤ書」45 章 7 節を朗読。

「わたしは光をつくり、また暗きを創造する」。神様は、私たちの人生の「暗き」をも、また「わざわい」すら神様が造りなさる。そしてまた「光」をも、「繁栄」をも……、全てです。私たちの人生の様々な出来事、どれ一つ取って神様によらないものはない。自分にとってそれが都合

が良かろうと悪かろうと、自分の願いと違ったことであり、また自分の理想とは大いに掛け離れていようとも、その事を起こし、その事を導かれるのは、この天地万物を含め、ありとあらゆるものの創造者でいらっしゃる、目に見えない力ある神様が、私たちのために事を定め、事を導かれるのであります。ですから「わたしは光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する」と。私たちは、日々の生活、人生の中で思いも掛けられないような不幸な目に遭う。原因を探してみると、あの人がこの人かと思うことが多々あります。また自分の至らなさもあるし、自分の力なさ、知恵のなさのために判断が間違っておった、選ぶべき道筋ではなかった、別の道に行ってしまった。だからこうなったと、自分で決めやすいのですが、決してそうではありません。私たちが不幸と思う事態、幸いと思う事にも、それを造り、そこへ私たちを置いて下さったのは、神様です。神様は、私たちの人生に「光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する」。そして「わたしは主である、すべてこれらの事をなす者である」と。「すべてこれらの事をなす者」、これが主、これが神。もう一度、このことをはっきりしておきたいと思ひます。「自分ではない？ じゃ、私たちの人生は何なのか？」「何のための人生なのか？」

先程の所へ戻りますが、「イザヤ書」43 章 21 節に、「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである」と。14 節以下を先程お読み

いたしましたが、これはイスラエルの民について預言者イザヤを通して預言された神様のお言葉であります。その当時のイスラエルはどうであったかと申しますと、神様に背いてしまった為に、神様は、イスラエルの民を無きものにしてしまおうと決めました。そのためにカルデアびと、バビロンという大国を用いて、イスラエルとユダという国を壊滅させてしまおう。全部取り潰してしまおうのです。そしてイスラエルの人々はバビロンの地へ、捕囚として連れて行かれることになりました。これはイスラエルにとって、大変残念なことであったのですが、神様はイスラエルという国、また民族を、何のために造られたのか？旧約聖書を読むと分かりますように、信仰の父アブラハムを父祖として、その末裔（まつえい）、その子孫たちが、イスラエル、神の民とされました。神様の選びの民とされました。これは必ずしもイスラエルという一つの民族、具体的な民族を取って、それを神様が特別に選んだという訳ではありません。これは一つのモデルといえますか、神様が、このように私たちが神様の民として下さる、具体的な実例として取り上げて下さる話であります。だから、よく言われますが、今イスラエルという国があります。またユダヤ人という具体的な民族がいます。ともすると、今、国を造り、民族としての行き方をしているユダヤ人と、聖書の旧約に語られているイスラエルとが同じものであると思いがちなのですが、これは全く違います。それとこれとはまた、別の話であります。聖書に語られている具体的な、この地上にあった

かつてのイスラエルという民族の歴史と重なる所もありますが、その全てではなくて、それを一つの例として切り取られて、神様のご計画に基づく、一つの目的のために、イスラエルという民を、ご自分の選びの民として下さったのです。何のためにそういうことをなさったのか？それは 21 節にありますように、「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである」と。アブラハムという人を選び、その子孫を神様が選んで、神と人とがどういう関係にあるのか？その民を神様は、どういうものとして取り扱ってくださるか、それは取りも直さず、神様に造られた人の存在価値、人の値打ちというものがどこにあるか？ということです。

「創世記」を読みますと、人が神様によって創られます。神に似る者として創られ、神様の栄光を現わす者として創られたと言われています。神様が創って下さったということは、神様がその者を通して、人を一つの作品として、神の力と恵みと神様の栄光、素晴らしさ、誉れを現わそうとされる。最初の人をエデンの園に置かれた時、「お前たち、勝手に人生を生きよ」と言われたのではなく、神の姿かたちに似た者とし、神の命の息を吹き入れて、神の作品として、神様のくすしき御業と、神様の御手の力、わざの栄光、誉れ、……よく芸術作品などは「誰が造ったのか？」といえます。絵画などを見ますと、レンブラントであるとか、ドラクロワとか、画家たちの名前が挙げられます。その人の作品を見ると、その

人の誉れです。ところが、その作品が出来損なったら、その不名誉もその作者のものであります。だから誉れにしろ、不名誉なことにしろ、一つの作品を通して何が注目されるかという、それを誰が造り、誰がそれを仕立てたか？神様は、人を創って、人を通して、神様の全ての力、神様の内にある全てのわざをそこから現わして、神のいますこと、神様の力の素晴らしさを現わそうとされたのです。ところが、その人が、残念ながら罪を犯し、神様から離れて、捨てられてしまいます。そして神のかたち、神の栄光を失ってしまう。言うならば、立派な芸術作品であったはずの一枚の絵画である私たちが、泥まみれ、ほこりまみれになって、どこかへ失われてしまった。そして似ても似つかない姿になって、「一体、こんな見る影もない作品は誰が造った?!」。神様の誉れではなく、神様の不名誉なかたちになった。

今でもそうでしょう。この世で様々なニュースを聞きますと、「本当にこれが人であるかしら」と思う。“犬畜生”という言葉がありますけれども、それよりもっと劣った、墮落しきった、悪に満ちた人の姿、それは創造者でいらっしゃる神様を冒瀆するといえますか、神様の名を損なうような事態であります。神様どころか、神なき世界を現わしているような…、「神様なんかいるものか！」と言わせるような事態や状況が、今私たちの見るところです。神様は、そこからもう一度、私たちが神の作品として取り戻す、失われて誰の作品か分からず、どこかの倉庫

に放り込まれて、ほこりだらけになって、見る影もないものになって、「こんなものは早く燃やしてしまえ」というような存在です。しかし、その作品にかすかに「神の作品」と、神様の名前が入っている。神様は、それをもう一度修復して、栄光を現わす作品に造り替えるために、ひとり子をお遣わしになられたのです。私たちがかつては、そのように失われたものであった者が、主の赦しにあずかって、今度は新しく、神の作品として、この地上に生かして下さい。今、神様の栄光、誉れを述べさせる神様の作品として、一人ひとりを用いて下さる。しかし、その作品はまだ完成していないのです。

私はよく葬儀の時に思わされることでもあります。お召されになられた方、最近のご高齢の方々が増えてきましたが、80, 90, 100年近く、地上での長い人生を生きてこられた。その方々の最後のお別れの時、告別式などでしみじみと思うことは、「生まれてからこれまで、いろいろなことの中に生きて来たんだろうな」と深く感じさせられます。喜びに満ちていた時、輝いていた時もあるろうし、失意と落胆の中で過ごしたことがあるでしょうし、怒りと憤りの中で、悶々（もんもん）として過ごしたこともあつたらうしと、私は葬儀をしながら、目の前に横たわっている人を見て、「大変だったね」と思う。こちらにも身につまされますから、「きっと嬉しい時も、楽しい時もあつて、手放しで喜んだ時もあつたらうけれども、でも苦しかった時もあつたらうね」、いろいろと思います。その時、感じるのは、

人生は一つの絵です、絵画です。神様が真っ白なキャンバスに、オギヤーと生まれたそのところから一つの作品を描き始める。そこには黒い影もあります。明るく輝いた光もあります。また時には流れるような時間が過ぎて行く。暗い時間が過ぎて行く、そういう筆遣いもあるでしょう。一つの作品、一枚の油絵の作品を見る時、そこにはいろいろな色があります。決して一つだけの色ではありません。それはまさに人生が、喜びの時、悲しみの時、望みに輝いていた時、また失意と落胆で暗く沈みこんでいた時、不安と恐れで過ごした日々の姿、それらが混ざり合って、全てのものが一つの作品になる。私たちは、自分でそういう作品になりたい、そういう一生を送りたいと願ったわけではありません。私たちはまだ未完成、色が埋められなければならない場所が残っている。それがどういう形で終わるか分かりません。取りあえずここまでの自分の造られてきた人生の作品を振り返って、心から「素敵な人生であった」と言えるならば、それは本当に幸いです。しかし「どうして私はこうなった!」「あのとき、あんなことがなければ良かった」「こういうときにこんな不幸な目に遭わなければ、今の自分はもっとこうなっていた、ああなっていた」と悔やむ思いがするならば、それはまことに残念なことです。なぜならば、その作品は自分が造るわけではないからです。私たちはあくまでも作品となるべきキャンバス、その絵の素材です。その上に油絵の具で描かれるのは神様です。これが創造者、造り主です。今神様は私たちの人生を仕上げ

て下さる。それと同じように、イスラエルの民、一つの民族を、神様は、実例として用いて、神様がどのようにイスラエルの民を造り出してこられたか。アブラハムから始まり、イサク、ヤコブ、次々と時代を越えて、神様はイスラエルをご自分の民として、絶えず関わって、彼らの悩み、悲しみ、苦しみ、喜び、楽しみ、いろいろな時々に応じて、彼らを支え、導き、励まして下さった。

今お読みいたしました所にも、そう記されています。16節以下に「**海のなかに大路を設け、大いなる水の中に道をつくり、17 戦車および馬、軍勢および兵士を出てこさせ、これを倒して起きることができないようにし、絶え滅ぼして、灯心の消えうせるようにされる**」。これはあの出エジプトの出来事のことです。奴隷の生涯から救い出されたイスラエルの民が、更に荒野の40年の旅路、その中で神様は、紅海に道を開き、エジプトの軍勢を海の中に沈めてしまう。そればかりか、岩を裂いて水を飲ませ、うずらやマナをもって彼らを養う。様々な不思議をもって、イスラエルの民を持ち運んで下さった。それはイスラエルの民のためというよりは、神様がどんなに愛なる御方、恵み豊かな御方、また神様が力ある御方でいらっしゃるかを現わすと同時に、神の栄光、神様という御方が、どんなに素晴らしい御方でいらっしゃるかを、神様を褒めたたえることができるように、この民を用いて下さった。ところが、イスラエルの民は、神様の御心から遠く離れてしまう。神様を忘れて、自分たちの勝手な歩みを

し始めた時に、バビロンという大国を興して、イスラエルをもう一度無くしてしまう。しかも、それは決してイスラエルが憎くて、「金輪際根絶やしにして、滅ぼしてしまう」と言われたのではないのです。70年の猶予を与えて、70年の間、その間だけバビロンへ連れて行かれなさい。そしてそこで結婚し、家を造り、畑を耕して、家族を養い、生活をしなさいと。それは先程からのたとえで申しますならば、一枚の絵の中の一つの出来事であり、イスラエルの民が、神様に背いて、その民の行く末が途絶えてしまうような事態。それは絵の中の一つの大きな出来事です。でも神様は、だからといってイスラエルをお捨てになられたのではなく、更にもっと違ったものに造り替える。神様の作品にふさわしく整えようとして下さる。その事を神様は、イザヤを通して預言していらっしゃるのです。

14 節に「あなたがたをあがなう者、イスラエルの聖者、主はこう言われる、「あなたがたのために、わたしは人をバビロンにつかわし、すべての貫の木をこわし、カルデヤびとの喜びの声を嘆きに変らせる」。イスラエルの民は国が失われてしまい、その時の最大な勢いをもって、多くの民を、その支配の中に置いているバビロン帝国、今やこの帝国が力をふるって、イスラエルの民を支配しようとしてきた。でも神様は、やがて約束の年月、70年が過ぎるならば、必ず人を立てて、今大喜びで力を誇り、自分たちこそが全ての支配者であると誇っているバビロンという国を無きにしてしまうと。ここに語られ

ているのはそのことです。「カルデヤびとの喜びの声を嘆きに変らせる」。今はイスラエルを滅亡させてしまった。自分たちが戦い取って、その民を捕虜、捕囚として捕らえてしまった。「ざまあ、見ろ、俺たちはこんなに強いのだ」と誇っているカルデヤびと、バビロンの人々。誰が見ても、この国が終わりになるなど思いもしない。ところが、神様は、「大丈夫、今喜び偉ぶっているカルデヤびとたち、バビロンの人々を、今度は嘆きの声に変わらせるから」と。夢のような話です。「そんな馬鹿なことがあるか」、おそらく多くの人々はそのように思ったでしょう。

だから 18 節に「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない」。「さきの事、いにしえのこと」、過去のことです。何年か前、また昔のことを思い起こしてはならない。私たちがいろいろなことを考える時、過去の経験や、人の経験を手掛かりにして、「こうしかならない」と決めます。ところが神様は、そういう過去の一切のデータは何の役にも立たない。神様は「見よ」です。19 節に「見よ、わたしは新しい事をなす」。神様が、これからはなされることは、これまでであったことがない、聞いたことがない、見たことがない、全く私たちの想像を越えた、思いを越えた事態や事柄を起こすと。これは今でもそうです。このときのカルデヤびとに対して、神様がご計画して下さったことはまさにそうでした。「こんな強力な大帝国になったバビロンが、滅びる時がくるだろうか?」、誰もしがそう思う。

かつての歴史を振り返るとそうです。ローマ帝国という地中海各地からヨーロッパの北の方までをその支配下に置いた大ローマ帝国は、今やどこにもありません。イタリアの一つの都市の名前に残っているだけです。かつて“日の出る所から日の入る所まで我が領土”と豪語していた大英帝国、エリザベス一世の時代はどうだったか？ 隆盛を誇って、この国が潰れることは想像だにできなかった。ところが、今ではあのブリテン島という北の小さな島国に残っているだけです。神様は、私たちの想像のつかない、人の思いもよらない、驚くようなことを必ず備えて下さる。つい私たちは、自分の過去を振り返り、これまでの歩みを振り返り、また人のいろいろな経験を聞いて、「こうしかない」「こうなるに違いない」「ああなってほしい」と、いろいろなことをそうやって決めますが、しかし、神様は、それを越えて、そういうものに捉（とら）われない。19 節に「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る」と、「やがて」と、これは「すぐに」という意味です。何だか遠くのように思いますが、文語訳聖書では「頓（やが）て」と表示されて、「速やかに」という意味の言葉が当てられています。「やがてそれは起る」。必ずそのことが起こってくる。「あなたがたはそれを知らないのか」、神様のなさるわざは千変万化で、一方方向だけではないのです。上でも下でも左右でも、どういう方向にでも、神様は手を広げなさるのです。私たちが考えるところは一方方向です。「これが駄目だったら、右かな、

左かな」と、精々（せいぜい）そのくらい。ところが、神様は 360 度、どのような方向からでも、どんなことでもお出来になる。神様は、私たちが造り、神の誉れを述べさせる作品として、神の栄光のために仕立てようとしておられる。私たちの描かれてきたこれまでの人生、後残り僅か、どういう色が使われるか？ 明るい華やかな色になるのか、くすんだ、あるいは落ち込んだ黒い色になるのか？ どういう色で最後が締めくくられるのか、最後のひと筆を、神様は、どこにどのように埋められるのか、これは分かりません。しかし、私たちはどう転んでみても、神様の作品であることに間違いがないのであります。そして神様は私たちがその御手をもって、最も善きものを造り出そうとして下さる。神の誉れを述べさせるため、神の栄光のために、神様はいろいろな問題の中に置いていらっしゃる。あるいは、事情や境遇、事柄……、皆さんが抱えていらっしゃる事柄は、どれ一つ取って神様によらないものはない。そして神様は、そこから思い掛けない、驚くべき、想像のつかないわざをして下さるのです。これが神様の神たる由縁（ゆえん）であります。神業とは、まさにそこです。人が考えて想像のつくような、チョロイことをなさるわけではありません。神様は、ここから何を、どのようにして下さるか？ 私たちは、決めてかかることはできない。しかし、何があろうと、どんなことが起こって来ようと、「これは神様のわざです」と私たちはしっかりと……、見るべきものは神様に目を留めて行くことに他なりません。

神を信じていきますなら、人や事情や事柄はどんなにでも変わります。一人ひとりの人生を完成に導こうと、最大の傑作に仕立て上げようとして下さる。神様の御手にすっぽりと握られ、委ねて、神様の御業を待ち望んで行きたいと思えます。「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」。有り得ないこと、考えられないような事態を、神様は、必ずそこから起こして下さるし、またそれを導いて、神の栄光をお取りになる。これは私たちに対する神様のわざでありますから、そのことを信じて、導かれるところ、与えられるいろいろな事を、一つ一つ、つぶやかないで、疑わないで、「ここに神様が私を導いておられます」「これは神様のなさることです」と信じて受けて行きたい。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。